

【やっぱり、本田が悪かった】

平川からアドバイスを受け、本田は社員一人ひとりとの個別面談を開始する。『まずは心』これを大切に、本田自身も本音を話し、社員の本心を聞くことに努めた。

「松井くん。実はな、オレも反省したんだ。今までは売上一辺倒で、お前たちのこともお客さまのことも全く考えていなかった。正直言ってお前たちのことも信じていなかった。それでいてお前たちにオレのことを信じろなんて言ってもそりゃ無茶だよな。申し訳なかった」

「社長・・・」

松井は今までに見たことのない本田を前にして当惑する。

それも理解した上で、本田は言葉を続ける。

「それでな、オレは心を入れ替えることに決めた。もう一度お前たちと一緒に会社を立て直したいと思うんだ。お前たち社員もお客さまも幸せになれる会社にしたいんだ。そのために、お前たちの正直な気持ちが聞きたい。たくさん不満もあると思う。言いにくいかもしれないが、もう一度だけオレを信じて、話を聞かせてくれないか？」

本田は、社員1人ずつ丁寧に想いを伝え、社員の不満や気持ちを聞いていった。

本田の変化を感じた社員たちは、ポツリポツリと正直な気持ちを語り始めた。

「僕も売り上げばかりを気にして、お客さまのことなんて考えていませんでした」

「アイデアを出しても通らないと思って、全部社長任せにしていました」

「社長が考えれば良いと思って、私は言われた事だけをやれば良いと思っていました」

「お客さまの思いよりも、自分が作りたいものだけを考えていました」

本田は反省する。

「ああ、やっぱりオレが悪かったんだ。

オレが社員の皆を信頼していないばかりに、社員達のやる気も能力も発揮させることができていなかった。でも・・・聞けて良かった。オレが変われば、社員達も変わるかもしれない」

全員の面談を終えた本田は、胸の奥で小さな何かが動き出すのを感じていた。

(何かが変わりだしている・・・何かが・・・)

本田の変化に、社員達の期待も士気も高まった。

「最近、社長変わったよな」そんな会話があちこちで聞かれた。

次の社内会議はいつもと違う雰囲気が始まった。

冒頭、本田は全社員に対して話し始める。

「先日、社員のみんな1人ひとりと話をさせてもらいました。忙しい中、時間を作ってくれてありがとう。みんなと話をして、みんなの不満や認識している課題を聞いて、1つ分かったことがあります」

いつもと違う雰囲気に、社員からはざわめきが起こる。

「それは、これだけ会社がダメになってしまったのは、すべてオレの責任だという事です。オレが皆を信頼せずに、1人で突っ走ろうとしてきたこと。お客さまの思いよりもオレの作りたいもの・オレの感性に合うものだけを作ろうとしてきたこと。それらの根源はすべてオレの独りよがりだったと気づきました。

これからは皆で力を合わせて、皆のアイデアを発揮して、そしてお客さまに喜ばれる仕事をしていきたいと思えます。どうか協力をしてください」

社員たちは驚き、互いに顔を見合わせた。

先日の個別面談で、本田の違う雰囲気は感じていたとは言っても、皆の前で自分の非を認めるなんて、これまでの本田からしたら全く考えられない行動だったからだ。

会議室は、しばらくの間シーンと静まり返った。

そして、1人の社員が口を開いた。

「社長、すみませんでした。

実は僕ウソをついていたんです……」

「社長、すみません。ボクもでした」

「みんな……、そうか、分かった。

正直に言ってくれてありがとう。その嘘はよくないけど、その原因はオレだった。

そのことは一度水に流して、これから皆で頑張ろう」

それから、本田と社員の信頼関係はググッと増す。

本田は社員の意見を尊重するようになり、社員は自分の意見をハッキリと言えるようになった。そして「それは、お客さまにとって良いことなのか」という基準で判断をすることができるようになった。

信頼関係を強めた社員たちは心に余裕が出て、お互いに気を配り応援しあうようになってきた。社員間の励ましは、心の温かさにつながる。それはお客さまにも伝わり、満足度も上がっていった。

「松井さんて、なんだか最近すごく張り切ってるよね！」

この前の提案書もすごく作りこんでくれていたし、メールの送信時刻もいつも遅いよね。あれを見るとウチのために頑張ってくれているなって思うよ。おかげで、ホームページからの問い合わせが増えてきてるんだよ」

今までのピリピリした社内が嘘だったかのように、冗談も言いあえる雰囲気になった。社員たちの笑顔も格段に増えた。ピリピリしながら働くよりも、笑いながら働く方が良いアイデアも出るし能率も上がる。本田にとって、株式会社 AAA にとって、良いことばかりが続いた。

成功を手につかみかけている。本田はそれを少し感じて始めていた。そして業績も上向いていく。

* * * * *

それから、株式会社 AAA は生まれ変わった。
風通しの良い社風になり、業績もピーク時の 90%まで回復した。

「1年前に比べてだいぶ良くなったな。

業績はもうチョイだけど、このままいけばあと半年もすれば最高売上が出せそうだ」

そして、ある日の朝。

「おはよう、川島くん」

「……」

「……ん？」

今日は調子悪いのかな？ あ、おはよう田中さん」

「あ……おはようございます……」

何だか社員の様子がおかしい。

いつもなら元気よく挨拶を返してくれるはずなのに、今日はどうも様子が違う。

それは川島くんと田中さんだけではなく、社員全員の事であった。

(どうしたんだろう？ 今日は何かが違う……)

不思議に思った本田は社員に聞いてみた。

「なあ、川島くん、今日はどうしたんだ？ 元気ないけど何かあったのか……!？」

「……いえ、別に……」

「そうか……ならいいんだが……」

「どうだ、中澤くん。何かあったのか？」

「いえ、大丈夫です」

社員は本田と目を合わせようとしめない。

「何なんだよ、お前ら！ 今日どうかしちやったんじゃないのか？」

変だぞ、一体何があったんだよ……

困ったことがあったら、皆で解決するのがオレたちだろ？」

「……………」

社内はシーンと静まり返る。

パソコンを叩くカタカタとした音だけが虚しく響く。

「駒野、どうしたんだよ？ オレに教えてくれないか？ 皆で解決しようぜ」

「社長！ やめて下さい！ そんな上っ面だけの言葉は！ オレ、昨日社長の電話聞きちゃった

んです…

社長はオレたちのこと、道具としか思ってなかったんですね。オレ、ショックでした」
「駒野…」

最近の株式会社 AAA の活気は、業界内でも注目を集めていた。
と同時に、本田は経営者仲間からの相談に乗ることも増えてきていた。

本田は、昨日電話で話した長友社長との会話を思い出した。
そして、自分の言葉を思い出し、青ざめた。

「いやあ、長友さん。

そうなんですよ！ おかげさまで最近は絶好調でして…

意外と簡単なもんですよ。

私とその気になって、社員のケツを叩いたら、結果はすぐに出ました。

猿もおだてりや木に登るって、よく言ったもんですよね。

(オレ、とんでもないことを言っていた…)

社員の心は一気に本田から離れる。
仕事のやる気も効率も下がる。お客さまにも良い提案ができるわけがない。
再び業績は一気に下降し始めた。

そこに追い打ちをかけたのが、リーダー格である川口の退職だ。川口は「もう社長とは仕事できません」と言い残して去っていった。そして川口を追いかけるように 3 人の若手社員が退職した。

「ああ、もう駄目だ…オレは取り返しのつかないことをしてしまった…」

本田は絶望した。社員は誰も本田のことを信用していない。
残った社員にも以前のやる気はない。ただ漫然と 1 日を過ごし帰るだけになった。

お客さまは離れ、業績は再び下降線を辿っていく。

「オレのせいだ…オレは社員たちのことを…」

オレが信用出来ていなかったんだ…オレのせいだ…
これが平川さんの言っていた『心』のことだったのか…」

本田は、自らの行動で絶望の淵に立つことになってしまった。

<取材・執筆：物語ライティング>